風の末裔シリーズ・2nd シーズンの１０

～ 薄雪 （うすゆき）～

©西風そら

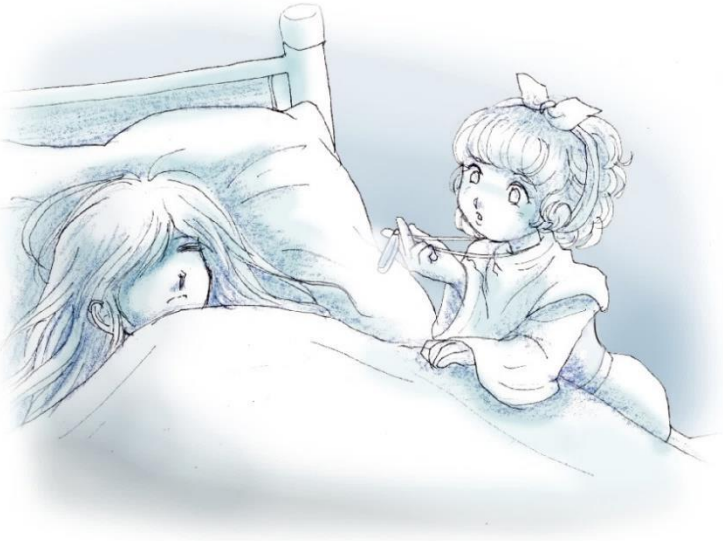
http://nisikaze.sakura.ne.jp

彩雲の中に虹が立ち、そのふもとに自分がいた。
「どこ…？　空の上かしら？」
カタカゴはふわふわと浮いていた。重い水の中にいるように、身体が自由に動かない。
「ああ、これ、夢、なんだわ」
足の下はどろどろしていて、何だか恐ろしい。でも恐ろしいと思う程そちらに引っ張られて、身体が沈んで行く。
「嫌だわ！」
動かない身体で空気を掻いた。何かが足に絡む。あの神殿で見た、表情のないレリーフ達が、ひび割れた白い手を突き出している。
・・恐い・・心細い・・
空にもがく手を、誰かの手が掴んだ。凄く暖かい、力強い手。見上げると、春の空みたいな真ん丸な目が見つめていた。口の両端が少し上がり、小さな八重歯が覗く。水色のふわふわの長い髪が顔に掛かる。
足元のどろどろしたモノは散り、彩雲の上に引っ張り上げられた。
凄く幸せな気持ちだった。何の不安も心配もない。嬉しくて嬉しくて涙が出そうだ。
そして目が覚めた。自分の涙で目が覚めてしまった。せっかく幸せだったのに。春空の目の優しさも、顔に掛かる髪のくすぐったい感触も、はっきりと残っている。
小さな簡易ベッドから起き上がり、側のベッドで眠るヒトを覗き込んだ。
「また悪夢を見そうな所を助けて下さったのね。ありがとう…」
御簾から薄く入る外の気配は、夜闇の中に薄紫が混じる。夜明け近いのか。
「…？？」
外を何かよぎった気がする。里は結界が張られているとはいえ、こんな外れには、たまに荒野の獣が入り込む。
ゆるゆると起き上がり、三本ホックを持って入り口に向かった。静かに御簾を開け、外を覗く。
「…!!」
思いもかけず、立っていたのは小さな女の子だった。
（そっくりだわ…!!）
一目で分かった。
「どうしたのです？　こんな外れの方へ…こんな夜明けに？」

女の子は後ろ手を組み、足をモジモジさせる。
「タンケン……」
老婦人は、女の子のはなだ色の瞳を覗き込んで優しく言った。
「そう、昨日来たばかりで、ワクワクする気持ちは分かるけれど、危ない道具の置いてある仕事場もあるわ。慣れるまではタンケンは我慢した方がいいですよ」
「うん」
女の子は素直に頷いた。
「でもね…」
「はい？」
「これ……」
女の子は襟首から懐に手を入れた。
「…??」
その手に握られて出て来たのは、金鎖の先に付いた、平たい薄ピンクの石だった。ぼうっと光り、小さく震えている。
「これは…?」
「向こうの曲がりかど辺りから震え始めたの。近付くに連れて震えが強くなって」
「……この石、どうしたのです?」
「母さまがくれたの。運気が上がるって」
「……」
巫女は室内を振り向いた。
ベッドのヒトは変わりない。長様の伺いなしに引き合わせない方がいいだろう。
「あっ」
しかし女の子は、後ろを振り向いて何かを見咎め、止める間もなく巫女の脇をすり抜けて、パオの奥へ滑り込んでしまった。
「あっ…駄目ですよ！」
巫女は慌てて女の子の身体を掴もうとした。次の瞬間、御簾の隙間からもう一人の影が飛び込んで来た。
「ユユ!!　何やってるんだ!!　ヒトの家に入り込むなんて!!」
「ああ、貴方だって入り込んでいますよ。静かにして下さい！」
巫女も久し振りに大声を出した。後から来た男の子は、すぐに止まって、恐縮した顔をした。巫女が振り向くと、女の子はもうベッドの側に立ち、そのヒトを覗き込んでいる。
「ああ…、駄目ですよ、離れなさい」
長様達は、彼を二人に会わせるのは、もう少しここに慣れてからって仰っていた。四十年以上も眠っている妖精なんて、子供には衝撃だと考えたんだろう。

しかし女の子は、水色の髪と睫毛の、お人形のような眠れるヒトを、じぃっと凝視している。
ああ、何て事…私がうっかりしていたせいで…。
巫女は女の子を引き離そうとしたが、ハッとその手を止めた。
女の子は薄ピンクの平たい石を、首から伸ばして掲げていた。石は強く光って小刻みに揺れていた。女の子は光にホッペを照らされながら、石と眠れるヒトを交互に見つめている。

「ユユ、行くぞ!!」
男の子が巫女の横を掻い潜って、女の子の腕を掴んだ。そのまま入り口まで引っ張って行く。
「すみませんでした」
「ああ、いえ……」
巫女は茫然と二人を見送ったが、女の子は振り向いて小さく手を振った。
「じゃあ、またね」
視線は巫女を通り越して、ベッドを向いていた。
二人が去り、しんとなった。巫女はカワセミの側に寄り、その手にそっと触れる。
「あら、嬉しかったんですね。それは良うございました…」



「まったく、お前は！　母様に、してはいけない事、いい事、教えられてたろ！」
兄は、まだ後ろを気にしている妹の手を引き引き叱った。
「うん…、でも、多過ぎて覚えきれないモン」
「ヒトの家に入り込むのも、寝ているヒトを覗き込むのも、いけない事!!」
「でも…」
「でもじゃない！」
「寝ていなかったよ、お話してくれたモン」
「…？　何て？」
そんなの聞こえなかった。
「…ん……」
女の子は、服の上から胸の上の石を押さえた。お話した事は確かなんだけれど、何て言われたかと問われると、答えられない…。
「今日から修練所に入るんだ。もう僕に手間を掛けさせないでよ。僕は、お前と違って、お父様みたいにずっと首席を取んなきゃいけないんだから」
「…うん……」
女の子には、既に修練所やお勉強より、ずっと気になる事が出来てしまった。
ここにはそういう不思議が一杯なんだろうか…？

＊＊＊

「アタシは早くお馬に乗りたかっただけなのにィ・・!!」
薄ピンクの石を握りながら、女の子はグチる。
里へ来て一週間…ユユがまっすぐ里家に帰ったのは、最初の一日だけだった。毎度の居残り罰の後の直行先は、里の奥の小さなパオだ。
「カワセミ長様は、ちょっとの悪い気が命取りですからね」
と言うカタカゴの言葉に忠実に、修練所の水場で手と顔と口の中をガシガシ洗って、水しぶきを撒き散らしながら一気に駆けて来る。今や、その進路上に住む者の名物となっている。
「秋までダメだって言うのよ！　母さまも『里の同級生と同じになるように』って、馬の飛ばし方、教えてくれなかったの」
水色の眠れるヒトの横で、起きているヒトに話すようにお喋りする子供を呆れ眺めながら、カタカゴは揺り椅子で繕い物をする。このお転婆娘が、修練所の馬によじ登って、振り落とされて破れたズボンのお尻を、縫っているのだ。
蒼の狼がこの子に馬の飛ばし方を教えなかったのは大正解だ。

知って里へ来たら、連日大騒動を巻き起こしていただろう。
「お山では上へ吹き上げる風が強く吹いて、それに乗って遊べたのに。あ・あ・あ・…もう、どれだけ地面の上だけで暮らしているのかしら!!」
女の子は受け答えしない相手に、飽きずに次々喋り続ける。子供ってこんなだったかしら?

当初カタカゴは、この連日の訪問者に困惑していた。里では子供は勿論、ここを訪れる者は殆どいない。大長様と長様達と…あと、オタネお婆さんくらい…。
心を全て曝(さら)さねばならないカワセミとの交流は、古い大人達も結局敬遠した。
ユユが『可哀想な病人に同情してお見舞いに来ている』という意識でないのは、すぐ分かった。良い意味で、そんなお利口な子供ではないのだ。ただただ『お喋りをしたい大好きな相手』の所へ駆けて来るだけ。
何となくそれが分かってからは、カタカゴもユユの好きにさせていた。しかし、ユユが帰った後のカワセミが上機嫌なのはいいが、疲れてしまっているのが気にかかる。

「あっ!!」
お喋りの途中で、急に子供は顔を上げた。
「巫女様にご用だって!!」
「えっ?」
カタカゴは縫い物を小机に置いて、揺り椅子から立ち上がる。子供は後退りして場所を開け、巫女がベッドのヒトの手を握ると、確かにビジョンが流れ込んで来た。
急ぎ手紙を書いて筒に入れ、止まり木の隼(はやぶさ)の脚に付ける。隼を腕に乗せ、外へ出る巫女に、子供も着いて来た。
「ノスリ長の所へ!! お行き!!」
隼は指示された方向へ、矢のように飛び立つ。
「カッコイイ!」
ユユは目を丸くした。
「お手紙なの?」
「ああ、カワセミ長様がね…、ノスリ長様のお弟子さんが、ちょっと難儀してる…って教えて下さったの。大丈夫よ、大した事はないわ」
「……??」
まだ難し過ぎたかしら…?
「そういうのが、カワセミ長様と巫女様の、オシゴトなの?」

「ええ、そうよ」
「スゴイ!!」
「そうね、カワセミ長様は凄いのよ」
「巫女様もスゴイ!!」
「私は…予知を受け取って皆に知らせているだけ。誰にでも出来る事なのよ」
「……ウソ…!」
「…??」
　女の子はいきなりむくれて、カタカゴを睨んだ。
「そんなコト言ったら、カワセミ長様、悲しいよ!」
　思いも寄らぬ事を言われて、巫女はちょっとたじろいだ。
「だってカワセミ長様、巫女様にしか、ここにいて欲しくないのに、誰でもいいなんて言っちゃダメ!!」
「……」
「そんな風に言ったら、たら…たら…あれ……?」
　ユユの頬っぺたをいつの間にか、涙がポロポロこぼれていた。
「ど、どうしたの?」
　この子を泣かせるような事を言ってしまったのだろうか?
「あれあれ……??……違うよ、アタシが泣いてるんじゃない…、これ、カワセミ長様の涙!!」
「・・?!」
「巫女様がそんな事言うから、悲しい心で一杯になっちゃったんだ!!」
「ええっ?」
　女の子がパオの中に駆け込み、またベッドサイドに座り込んだ。カタカゴも戸惑いながら後に続くが、ベッドのカワセミは変わりなく、泣いているなんて事はなかった。
「カワセミ長様は泣く事が出来ないから、アタシが代わりに泣くんだね」
「そ、そうなの?」
　カタカゴは一生懸命理解しようとした。
「もう、あんな事、言わないでね」
　女の子は鼻をすすりながら言った。
「…ええ、分かったわ…」
　この子がただのヒステリーでなく、何となく筋道が立って喋っているのは分かった。

　程なく隼が戻って来た。
　手紙はなくなって、筒が逆さになって『了解』の意味を示していた。ホッとして、隼に褒美の干し蜥蜴を与えながら、カタ

カゴはやっと気になっていた事を聞いた。
「ね、貴方、お喋りしていた時、この方が私を呼んだのが分かったの？」
いつもは巫女の頭の中にサインが響くのだが。
「うん、いっつもお話しているよ」
「えっ？」
頭の中に直接話し掛けるのは、消耗するので、必要最小限しかやらない筈だが？
「アタシが愉快なお話すると、カワセミ長様、楽しい気持ちになるの。悲しいお話すると、心配の気持ちになるの。怒ると、慰める気持ちになるの。いっつも一緒の気持ちの中で、お話しているんだよ！」
「……」
この子は、言葉も気持ちも全く一緒で、一切飾りがないんだ。だから難しい力を使わずともそのまんま、このヒトと通じ合えるんだ…。
＊＊＊
外で呼び声がして、ユユが飛び上がって返事をした。御簾が上がってツバクロが顔を出す。
「お父さま!!」
数日振りの父親に、ユユが飛び付いて頬にキスをした。
今しがた遠方より戻ったのだろう、旅支度のマント姿のまま娘を胸に抱え、申し訳なさそうに巫女を見る。
「カタカゴ…済まない、大切な場所なのに。入り浸らないよう言い聞かせるから」
フィフィにでも相談されたんだろう。
「カワセミ殿はユユがお好きだから、来るのはいいんです。ただ……」
ユユが不安顔でカタカゴを見る。
「この子の話に夢中になって、長としての仕事に穴が開くのを不安に思っていらっしゃいます」
そうなのだ。
任務をこなす仲間や、里や草原全体の危険や異変を予知して知らせるのが、三番目の長の役割なのだ。常に、アンテナを張り巡らせておく必要がある。事実、この四十余年、彼の予知で命拾いした者は数知れない。
「そういう事だ、ユユ。カワセミはとっても忙しいんだ。お前のお喋りをずっと聞いている暇はないんだよ」
「ぶう〜〜」

繕い終わったズボンを履かせ、ツバクロが娘を肩車して去って、カタカゴは溜め息をつく。

カワセミの手を握ると、とっても残念そうだった。

「私も寂しいですわ……」

カンテラに灯をともして、揺り椅子に座り、目を閉じる。

巫女はここの所、本当に体力がなくなっているのを自覚していた。ベッドのこのヒトはちっとも変わらないのに、自分の身体はどんどん年月を重ねていく。ここへ来て、あの娘が現れた…と言う事は、流れのひとつなのだろうか？

目の裏に、昔と変わらないカワセミの顔が映った。大きな目を見開いて、さっきのユユみたいにむくれた顔で首を横に振る。

「昔、貴方と同じに、蒼の妖精に生まれたかったと…ずっと思っていました。でも、今は、人間でよかった…って思っていますよ…」

ツバクロに叱られてからも、ユユは曜日と時間を決めて、へこたれずにやって来た。

『他人に合わせる』という事を、教えられずとも学び取ろうとしていた。お喋りは控えて、見よう見まねで巫女の手伝いをした。お友達と遊ばなくていいの？　と聞くと、お昼休みに集中して遊んでるからいいの！　と大真面目に答えた。

ある放課後、ユユが例によって居残り罰を済ませて、全力で走って行くと、パオの外に梯子が掛かっていた。

ノスリ長が梯子の上で屋根に手を掛けて、何かやっている。

「長様……あの、こんにちは…」

「おう、丁度よかった。ちょっと登って来て、ここを押さえていてくれ」

「あっ、…はいっ」

ユユは叱られなくてホッとして、梯子を登った。

「ここのほつれ目を直そうと巫女殿が道具を取りに行ったんだが…、場所が分からんのかもしれん。ちょっと行って来る」

「はい」

ユユは小さい手で真剣に布の端っこを押さえた。ノスリ長様は、小さい子だからとかあんまり関係なしに用事を頼んでくれる所が好きだ。

二人が道具箱を抱えて戻って来た。

「……？？」

ユユにも分かる位、二人の表情が硬い。

「巫女様…？　こんにちは…」

「あ、ああ…ユユ、いらっしゃい……」
「……？？」
「あ、そう…これ、帰る時に持って帰ってね。ナナの忘れ物なの」
巫女は何故だかナナの書物と石板を抱えていた。
「…はい……」
やっぱり何か変だ。
ユユは修理を手伝い、巫女はお茶を入れて運んで来た。
「時に、ユユ」
ノスリ長が梯子を降りながら、なんだか改まって聞く。
「はい」
「お前のお母さんは、蒼の一族とか、長の事とか、どういう風に教えてくれたんだ？」
「えっ？」
いきなり、なんだろう？
「え――と……」
二人とも黙ってユユの言葉を待っている。何だか緊張して来た。
「その……蒼のイチゾクは…草原を統治する、偉大なイチゾクで……」
二人、顔を見合わせる。
「その里の一員になるんだから、恥ずかしくないよう、行動に気を付けなさい、貴方の失態が皆の恥になるんですよって…。長様は…」
二人、真剣にユユの顔を見詰めて聞いている。責められているんだろうか？
「長様は、その蒼の里を束ねる偉いヒトなんだから、お父様にも、他の長様にも、人前で軽々しく甘えちゃ駄目だ、礼儀をつくしなさいって…。ごめんなさい!! アタシ、全然出来てないっ!!」
ユユは二人の視線が痛くて、緊張がマックスになった。カタカゴがそれに気付き、ユユの肩を抱いた。
「ノスリ殿…やはり蒼の狼殿は、そんな大それた事は言っていないんです。受け取り方の問題なんです。ところで、ユユ」
「は、はい…」
ユユはまだ緊張している。
「私が、蒼の妖精ではなくて人間だってのは、分かっていた？」
「へ？ あ、はい」
「それに対して何か思わないの？」
巫女はなるべく優しく聞いたが、ユユの緊張は取れない。

「……」
「ユユ、思っていた通り、言ってごらん」
ノスリ長も口を添えた。
「…えと、えと……えーと……!!」
二人がずっと黙って待っているので、ユユは顔が真っ赤になった。
「ご…ごめんなさい!! 何にも思ってませんでしたぁっ!!」
二人は口を半開きにしてユユを見た。
「そ…か…、気にしなきゃいけなかったんですねっ。アタ、アタシ、何も考えてなくって……」
二人に責められた気分で泣きそうなユユの頭に、カタカゴが手を添えた。
「答えてくれてありがとうね。知りたかっただけなの。さ、カワセミ長様の所へ、今日の事、お話に行ってらっしゃい」

「えらい違いだな…」
女の子がパオに入ってから、ノスリがポツンと言った。
「ノスリ殿、どちらがよい…とかじゃない気がします。ナナの方が、言われた事や見た事に対して、自分の中で考えて消化しているんです、方向はともかく。ユユは何も考えず、在るがままを受け入れる。大人にとって楽なのはユユですが、…間違いながらもぶつかって来るナナ…。どちらが『いい子』って区別はないと思います。…ただ…」
「…ただ?」
「ナナが、一人であの考えに思い至ったのかは……ちょっと気になります」
パオの入り口にユユが姿を見せる。
「カワセミ長様がご用だって……」
そして、ユユは家に帰るように言われ、二人は慌ただしく何処かへ飛んで行った。

ずっとずっと後……ユユがそういう事、理解出来る歳になってから、ノスリ長がその時の質問の理由を教えてくれた。
そして、そういう日々の細々とした事で、何度巫女に助けられていたか、どれだけ教えられたか、という事も。
短い一生の、更に短い十六の年まで……いや、もっと短い、目を開けたカワセミと過ごした数ヵ月足らず……人間ってなんて色濃く生きるんだって、思い知らされた…って事も……。
そんな話の最後、ノスリ長は独り言のように締めくくった。
長い一生を送る自分には、ただ、忘れないでいる事位しか出来

ない…と……。

＊＊＊

朝もやの萌木の森。

繁みの中で息を殺す二人。水色のふわふわの長い髪の妖精の青年と、黒髪の小柄な人間の少女。

「来ないねえ……」

「来ませんねえ……」

萌木の森の木霊に会う為に、早朝から延々待っている。木霊は臆病で用心深い。呼んでも絶対出て来ないから、こうして通りすがりを待っているのだ。

「カワセミ殿の任務って、地味なのばっかりですねえ…」

「斬った張ったはノスリの役目。口車と外面(そとづら)使うのはツバクロの担当。ボクは…」

「ボクは?」

「その他……」

「……」

「……今、ガッカリした?」

「……いえ……」

それから更に数時間が過ぎ、夕空にカラスが鳴き出した。

二人は静かにじっと待つ。話はしない。ただ隣にいて、触れもせず離れもせず、少しの体温を感じる距離で、ずっと。

一番星の夕まづめの頃、向こうの木枝にぽう…と光る小さいモノが現れる。

見つけた…!! カワセミが印を結ぶ。印の中に木霊を捕らえた。巫女は隣で息を止めて待つ。

カワセミは目を閉じて、頭の中で木霊と話している。結構な時間が過ぎて、金縛りに遭っていた木霊が尻餅を着いて頭を振り、灌木の奥に消えた。同時に水色の妖精も、目を開けて前のめりに傾く。

「完了ですか?」

巫女はその身体を支えながら聞く。

「はい、…やはり、木霊の中で、争いがあるんです。それで、森のバランスが崩れているのです」

……あ、オシゴトモードだ…。

カワセミほど、長の弟子としての顔とノーマル時の顔を極端に使い分けているヒトも珍しい。それが、普段はエネルギーをセーブしてるせいだ…と、巫女が気付いたのは最近だ。

「急ぎですか?」

「いえ、今日明日どうなるものでもない。長が仲介に入るようになると思うけれど…。あの木霊にマーキングしておいたから、

次はこんな待たなくていいと…思う…」
説明しながらカワセミの声は元に戻り、抑揚がなくなってスローになって来た。

「では少し休みましょう」
「大丈夫だよ…、帰ろう」
「駄目です。この前も、帰りに馬から落っこちそうになったでしょう。休んで下さい」
そう言って、ふわふわの頭を無理に地べたに押し倒した。
頭の下に上着を敷き、巫女が水場で手拭いを濡らして戻ると、妖精は口を開けて寝息を立てていた。ほら、やっぱり休まなきゃ……。
額を冷やしながら横に座る。このヒトが無茶して危ない目に遭わないように気を配るのが、私の役目。それが蒼の長の為に働く自分の歓びだと思っていた。
でも近頃ちょっと違う。いや、初めからそうだったのに、気付かなかっただけなのか。
「ふにゃあ……」
水色の妖精が寝返って、上着の枕から頭を落とした。この分だとまだしばらくは起きないだろう。

巫女は上着を妖精の身体に被せ、落っこちた頭は自分の膝に乗せた。足を伸ばして、身体の後ろを手で支え、空を眺める。西の空の茜に対して東から濃紺が迫る。

膝から温かみが伝わって来る。それはお父さんや家族の物とは違う感じ。小刻みに上下する水色の睫毛を眺めていると、胸が絞られるような感じがする。何だろう……？

でも、ずっとこんな風にいたい……と想う。

明日も…明後日も……。

頭がカクンとなって目が覚める。

揺り椅子で眠ってしまったらしい。久し振りに見た、何て懐かしい夢。

カンテラの燃料が切れそうでチラチラしている。夏の頃、久し振りにハイマツの丘で術なんか使ったりして、それ以来疲れやすくなっている。こんな風に居眠りしてしまうなんて。

ロウソクを灯してカンテラに燃料を継ぎ足す。『予見』は何時あるか分からない。常時万全の準備は必要だ。

ふと見ると、御簾の隙間から白い物がチラチラ見える。

「初雪だわ……」

御簾の隙間をキッチリ閉めて、毛布を出してベッドのヒトに被せた。明日は分厚い方の寝間着を着せてあげよう。

そういえば、ユユ…、明日から待望の乗馬訓練が始まるってはしゃいでいた。あの子が自由に飛び回る姿を見るのが、こちらも楽しみになっている。

「勿論、貴方にも見て貰いましょうね」

水色の妖精は穏やかに眠っている。

この睫毛が少し待てば必ず開くと分かっていたから、あの頃の自分はあんなにも幸福だったんだ。

「幸せって後になって分かる…って、本当ですね…」

では、今の自分は、ずっと後に思い返すと、幸せなんだろうか？

「きっと、幸せだわ…」

横になるのは後にして、もう少しこの睫毛を眺めている事にしよう……。

＊＊＊

朝……

一番に見つけたのは、ユユだった。

初雪が降った。故郷のお山と同じ、真白な世界…!! カワセミ長様は、雪が大好きと言っていた。この一番の、綺麗な真っ白い風景を持って行ってあげよう。

里の奥の小さなパオに行くと、もう足跡が付いていた。あらぁ、巫女様、早起きだこと。この分だと、一番の雪をあげる楽しみは、巫女様に先を越されているかもしれない。

「お早うございます！」

外で叫んだが、返事がない。

「……？」

よく見ると、パオの入り口の足跡は、出て行ったきりで戻った後がない。

「お留守なのかしら？　こんなに朝早く…」

御簾を細く開けると、いつもの揺り椅子に、巫女が座っていた。

「…？？」

ユユは御簾をくぐって中に入った。巫女はぐっすり眠っていて、胸から下に毛布が掛かっていた。昨日ベッドの冬支度で力仕事をしたのでお疲れなのね…。

「…あっ……!!」

ベッドが空だった。

巫女が昨日変えたばかりの洗いざらしたシーツの中央が人型にへこんで、掛布が捲り上げられたままだった。

「……んん？？……」

この事実に驚愕するには、ユユは物を知らない子供過ぎた。

取りあえず、お疲れで眠っている巫女様を起こさないよう、そおっと外へ出た。

足跡はよく見ると、指の形のある裸足だった。

「こんな雪の中で……？」

ユユは足跡を辿った。少し行くと、今度は馬の足跡に行き会った。まるで呼んだように、厩からこの足跡のヒトの所に、馬が来たのだ。

「ここで、馬に乗って、飛んでったっていうの？」

その時、また雪が降り出した。視界が悪くなる。

ユユが辺りを見回すと、修練所の馬が数頭、小さな厩に繋がれているのが見えた。今まで散々ユユを振り落としてきた奴だ。意を決して駆け寄る。

「ねえ、あのヒトが何処へ飛び去ったか見ていた？　こんな雪の中、裸足じゃ大変だよ。連れてって、お願い!!」

綱を解いて、裸馬によじ登る。

何の気紛れか、馬は子供を振り落とさなかった。そのまま静かに厩を出て上昇し、さっきの痩せた馬が飛び去った方向へ、

音もなく駆けた。

初めての飛行の感激なんかなくて、ユユはひたすら馬のタテガミにしがみついて耐えた。そんなに距離は飛ばなくて、馬はすぐ降下してくれたのでホッとした。

「ここ……どこ…？」

馬の降りた所は、ハイマツが覆う小高い丘だった。

里に来てから外に出たのは初めてだ。丘の周囲は丈の高い草原で、今は初冬の鈍い金色だ。それに白い雪が、花のように降りそそいでいる。

ユユは馬を降りて、辺りを見回した。乗って来た馬は、丘の裏側に駆けて行った。追い掛けると、初めて見る痩せた馬が、そこにいた。更に二頭の馬から視線を滑らせると……

「・・!!・・」

そのヒトが……いた……!!

丘の下に向いて、すっと立って、水色の長い髪を雪風になびかせていた。この寒空に、薄い寝間着一枚に裸足…。

しかしユユが驚いたのは、その部分じゃなかった。

丘の斜面一面に、カタカゴの花が咲き揃っていたのだ。

ヴェールみたいな薄雪の降り積もる中、その薄ピンクの群落は、明らかに違和感があった。この花は確かに春一番に雪をついて咲くのだが、こんなに咲き揃うのは、すっかり春になってからだ。

「しかも今は冬の初めなのに……」

ユユの呟きに、そのヒトが振り返った。

「……!!」

吸い込まれるような……水色の瞳……!!

その薄い唇が動く。

「…綺麗でしょう……」

「……」

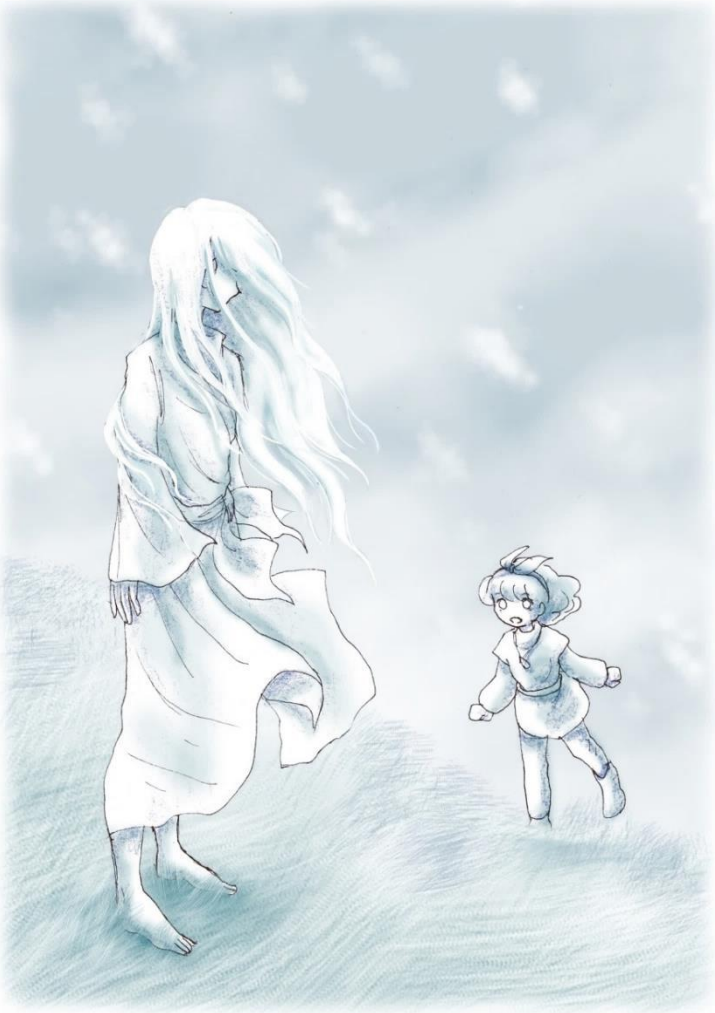
「…巫女の為に、咲いてくれたんだ……」

程なく、丘に三頭の馬が降り立つ。二人の長と、大長……。

水色の目でしっかり見つめる妖精に、大長が歩み寄って静かに言った。

「…おかえりなさい……」

「…ただいま……」



それから離れた二人に視線を移す。

「…やあ……」

「…おぉ……」

「…うん……」

この人達も言葉は要らないんだ……。

ユユは黙っていた。自分の入る隙間は見えなかったので。

後から来た三人は赤い目をしていた。鼻の頭も赤いのは、雪の中馬を飛ばして来たせいとは違う感じだ。

「見事ですね……」

大長は、上衣をそのヒトに掛け、丘の斜面を眺めながら、上ずった声で言う。

「貴方が、咲かせたのですか…?」

「いいえ……あのヒトが……」

水色のヒトは、丘の上の二つ玉石の方を見やる。

「ボクは、ちょっと、手助けした…だけ……」

「そうか…巫女殿の、お袋さんが…」

ノスリが鼻をグジュグジュ言わせる。

「そう、巫女様!! 巫女様は?!」

ユユがついに大声を出した。

「カワセミ長様が起きたって知ったら、きっと大喜びだよ!!」

しかしユユのテンションとは逆に、三人の大人は目に暗い影を落として黙っている。

ツバクロが歩み寄って、ユユを抱き上げた。

「ユユ、巫女様はね、たいそう頑張り過ぎて、…お疲れなんだよ」

「そう? 昨日も大仕事してたもんね。そっか」

ツバクロはあどけない娘をぎゅっと抱き締めた。大長は顔を背け、ノスリはただ俯(うつむ)いている。

カワセミは雪をきしませて丘を登った。其処は四十年以上前に巫女が名前を授かった場所だった。

「巫女は、ここにいるよ」

見上げる一同に、カワセミは正面向けて、すくと立って睫毛を閉じる。両の腕を後ろに回して、うなじから髪をかき上げた。

空中の雪を舞い散らせて、透明な光がその身の両側に広がる。

皆、茫然として、水晶のような薄蒼色の羽根を見つめる。
ただ、見つめる。
「巫女はずっとボクと在る。こんなに嬉しい事はないよ」

＊＊＊

蒼の里で、ユユには好きなモノが三つある。
いや、里の中はユユの好きなモノだらけなのだが、特別に好きなモノ。
一つは、南の放牧地の金鈴花の群落。
一つは、里の近くのハイマツの丘の、カタカゴの斜面。
そして、もう一つは……

乗馬の授業を終えた巻き髪の女の子は、厩に降り立つと帰りの挨拶もそこそこに、勉強道具を引っ掴んで里の奥へ走る。その胸には薄ピンクの平たい石が揺れている。
大昔は産屋、その次は馬具置き場…、次は眠れるヒトと巫女の場所、…今は……
「カワセミ長様――!!」
ベッドから落っこちる音がする。

女の子はお構いなしに御簾を上げて光を入れた。
「う～～…眩し……勘弁してよ……ユユ」
「もう夕方ですよ!! どんだけ寝てるんですか!!」
「明け方までオシゴトだったの…。もちっと寝かせて…」
「今日は、森の精気を集める術を見せてくれるって言ったじゃないですか!! そのコトばっかり考えて、今日も危うく居残り罰喰らうトコだったんですよぉ!!」
「それはユユのせいだろ」

ベッドの下の妖精はゆるゆる起き上がった。ボッサボサ頭にヨレヨレローブ。着たまま寝たらしい。
「とにかく行きましょ！ 行きますよ！ 早く靴履いてぇ!!」
「そんなモン履いたら術が逃げる。ユユも裸足になれ」
やっと起きた妖精は、ベッドに腰掛けて、背中の細い羽根をシュッと整えた。
「裸足ィ～？ ええ～～!!」
「将来ボクの弟子になりたいんなら、今から慣れろ」
「ぶ～～…はぁい」

奥のパオから直に飛び立つ自由な二人を見ながら、執務室の

ナナは舌打ちする。
「あいつ…！　正式な弟子でもないのに！」
「君もだろ、ナナ」
　ノスリは書類の山にうんざりしながら、ペンをクルクル回す。
「そっち、地域別に分けておきました」
「おお、サンキュな」
「一宿一飯の恩義がありますから」
「お前さん、ホンットに、子供らしくないな」

　ノスリ家で、兄姉の教科書で修練所の学科を全制覇してしまったナナは、今は非公式に、大長にくっ付いている。さすがにこの年で修了証を出す訳には行かないのだが、もう殆ど修練所には通わない。
　あの日ハイマツの丘であの女性に教わった事…、まだ自分には分かっていないんだと思う。そして、多分自分は、一生それを忘れないで、追い求め続けるんだと思っている。
「子供らしいって、将来の尾根道に向かって、山道を切り進むのが子供でしょう？　母様がそう言っていましたが…、他に何かあるんですか？」
「ああ、分かった、分かった、お前さんの言う通りだ」

こいつ、絶対、母親とその兄に似たんだ……。
　入り口が開いて、その兄が入って来る。
「ナナ、行きますよ」
「はいっ」
　大長も、昔初めて三人の弟子を取った時のように、若々しい顔になっている。まだまだ隠居には遠いんだろうな。

「……と、まあ、そんな感じ……」
　風出流山の神殿でお茶を飲みながら、ツバクロは狼に子供達の近況を語る。山を降りて丁度三年になるが、今年はついぞ山に帰らなかった。
「君、寂しいだろ」
「いえ、子供はどんどん親を置いて行く物ですから」
「たまには降りて来ればいいのに」
「……」
　狼は大切なイルアルティ…巫女の葬儀にすら来なかった。ただこの山で喪に服していた。
　同じ有翼のカワセミがいるんだから、気にしなくていいじゃないか…と、ノスリは言っていた。
「だから、余計…なのは分かるけれどね…」

狼は静かに頷く。大長はカワセミを里から離す気は毛頭ない。だからこそ、兄の心配を払拭する為に、彼女は神殿(ここ)を守るのだ。そう、狼は、此処を出る者は元より、来る者からも守っているのだ。

狼が四枚の羽根を背負い、神殿に乗り込んで半キレ気味に、中に巣食うモノを一掃し出した時は、息子を亡くしたショックで八つ当たりしているのかとさえ思った。

違う……。

有翼人の神殿を占拠し守るのは、今の時代に羽根を背負った者のやるべき事…と悟っていたのだ。

ツバクロにそれが分かったのは　カタカゴが亡くなってからだった。

カワセミには分かっていた。

「羽根を背負ったボクが蒼の里にいても大長が安心していられるのは、蒼の狼さんがあすこを守ってくれているからだよ」

「僕には分かっていなかった……ゴメン」

「あら、貴方は、分かっていなくても、説明も求めないで、ただただ私を信頼して側にいてくれたじゃありませんか。そっちの方が凄いですよ」

「そうなの…?」

「そうです…」

雲海に蒼い月が掛かる。狼は幾年月ここでこの月を眺めている事だろう。

ツバクロは想う。その幾年月の何分の一か、自分がその横で共に月を眺めていたいと。それがこの女性(ヒト)に多くの物を貰った自分の、護るべき場所だと。

蒼い月は雫のように明るく、その下の地上に、雲の形を映していた。

～おしまい～

二〇〇九・一〇・某

「わしの、曾々祖父がその双子の兄の方ですじゃ…」

老長はそう言って、徒然(つれづれ)とした長い話を締めくくった。まだまだ幾らでも話はあるのだが、かなり夜も更けてしまった。東方から来た三人の旅人もお疲れのようだ。

三人には明日、孫に案内させてやればよい。

里の奥に遥々(はるばる)広がる、黄金(こがね)の花畑を。

蒼の里は連綿と時を重ねて、過去から未来(さき)へと変わらずにある。

中天の天の川も、千年万年変わらずに、里と草原を見護る。